

博士論文要旨

学籍番号	1 2 1 1 0 0 1	氏名	布施 恵子
論文題目	治療法の意味決定を行う再発がん患者への看護支援のあり方に関する研究		
<p>目的：本研究は、治療法の意味決定を行う再発がん患者への看護支援を実践できる臨床現場を目指す取り組みを通して、治療法の意味決定を行う再発がん患者が求める療養生活を送り続けるための看護支援を明らかにすることを目的とする。本研究において、治療法を、「広義的解釈とし、疾患に対する積極的治療介入と症状緩和目的の対処療法も含む治療方法」とし、意思決定を、「決定する内容を理解するために過去の体験を想起し、一番望ましいと思える行動方針を思い悩みながら決めていくこと」とする。</p> <p>方法：本研究は、3つの研究で構成する。研究1では、がん診療連携拠点病院の看護師に面接調査を行い、治療法の意味決定を行う再発がん患者への看護支援の現状から、取り組む課題や発展させると良い事柄を明確にする。研究2では、治療法の意味決定後の再発がん患者と看護師への面接調査で取り組む臨床現場の現状を明確化し、患者の面接結果を資料に、看護師間で臨床現場の課題の明確化と課題改善を目指した看護支援を考案して実施し、看護を受けた患者の意見を資料として実践を振り返り、実践の評価を行う。研究3では、考案した看護支援を受けた患者と、実践の振り返りに参加した看護師に面接調査を行い、取り組みによる成果を明確にする。【倫理的配慮】研究協力者に、研究目的や方法、研究協力の自由意思や匿名性の保証などを文書を用いて説明して同意を得る。岐阜県立看護大学大学院看護学研究科論文倫理審査部会の承認を得て実施した（24-A012-2）。</p> <p>結果：【研究1】7施設の看護師7名の面接から、「多様なニーズを持つ患者に介入するための高い能力が求められる」などの課題、「患者に接する機会を活用し、早期に積極的な介入が必要な患者を見つけて介入する」などの発展可能な事柄が得られた。【研究2】患者5名の面接で得られた「治療開始後の看護師は、訴えに対しては親切に対応してくれるが、気遣いまでは無いように思う」などから〈患者を理解する看護師の姿勢が不足している〉が課題とされ、既存の用紙を改訂して治療法などへの思いを個室で聴き、記録で共有して看護を実践した。2名の患者への実践を振り返った結果、「患者のイメージを固定すると、患者理解を誤り、必要な看護援助が実施できない」などが得られた。【研究3】患者からは「熱心な看護師の対応に安心できる」「気にかけていることが伝わる」「今後は相談することを検討している」が得られ、看護師からは「訴えが無い患者のことも意識しておくことが必要である」「継続看護が必要な患者に関して外来との連携が必要である」が得られた。</p> <p>考察：患者の意見をもとに看護実践を振り返ることは、看護師が患者の求める看護に気付けるとともに実践改善の動機づけとなり、課題改善を目指して考案した看護支援は、看護師個人の看護の質向上をもたらしたと考える。患者の思いが反映された治療法を継続できるように、治療や療養の場に関わる看護師が、質の高い看護支援を途絶えさせないように連携することが、治療法の意味決定を行う再発がん患者が求める療養生活を送り続けるための看護支援であり、看護支援のあり方であると考え。</p>			

(別記様式7)

番 号 :

平成 27 年 2 月 17 日

平成 26 年度博士論文審査結果報告書

主 査 北山三津子
副 査 黒江ゆり子
副 査 服部律子

平成 26 年度博士論文の審査及び最終試験を実施した結果は、下記のとおりです。

記

学籍番号：1211001

氏 名：布施恵子

審査結果： ○ 1. 合格 2. 不合格 3. 保留

[審査結果要旨]

(1,000 字以内)

論文題目「治療法の意味決定を行う再発がん患者への看護支援のあり方に関する研究」は、治療法の意味決定を行う再発がん患者への看護支援を実施できる臨床現場を目指す取り組みを行い、その取り組みを通して、再発がん患者が求める療養生活を送り続けるための看護支援のあり方を探究したものである。

学生は、第一に、がん診療連携拠点病院の看護師に面接調査を行い、治療法の意味決定を行う再発がん患者への看護支援の現状から、取り組む課題等を明確にした。第二に、それらの課題を踏まえ、実際に看護支援を提供する臨床現場の現状を明確にするとともに、明確になった現状を看護師間で検討し、課題改善を目指した看護支援を考案して実施・評価を行った。さらに第三に、考案した看護支援を受けた患者および取り組みを行った看護師に面接調査を実施し、取り組みの成果を明確にした。

それらの結果、考案した看護支援は、患者の語りを聴く技法を含む事前研修を伴って実践され、また、看護師の要望により看護支援チェックリストの作成へと発展した。実施後の聞き取り調査では、考案した看護支援を受けた患者からは、熱心な看護師の対応や看護師の細かな配慮に対する安心感等の意見が得られ、看護師からは、訴えがない患者のことを意識する必要性、及び継続看護が必要な状況における他部門との連携の重要性など、再発がん患者が自身の望む療養生活を送り続けるための看護に繋がる認識を示唆する意見が得られた。

これらの過程は的確にデータ化され論述されており、治療法の意味決定を行う再発がん患者への看護支援に関する実践理論の構築に資する研究として高く評価できる。

審査委員会では、これらの取り組みは本研究科の倫理基準に基づいて実施されており、論旨が明確で一貫性があり、博士論文審査基準に適合するものであることを確認した。当該学生は審査委員会に3回出席し、主査・副査からの質問に答え、かつ直接指導を受け、最終試験に合格した。

以上のことから、本論文は博士論文として価値あるものと認める。